

佳作

『夜間飛行』 サン＝テグジュペリ著 堀口大學訳著

経営学部 経営学科4年 橋本 隆広

私たちは、日々やらなくてはいけないことをいくつも抱えながら生活している。例えば定期券の更新やクリーニングの受け取り、犬の散歩などである。しかしそのやる気を妨げるマイナスの要素があるとき、ついつい逃げてしまった経験は多かれ少なかれ誰にでもあるだろう。

私における経験は学校のテストであった。いい点数を取るためには勉強しなければならない。わかっているのだが、ふと目に入った漫画を手に取り、気づけば1、2時間経っていたということはよくあることだった。そのような時に私を机に向かわせてくれたのは、力強い決意でも甘いご褒美でもなく、有無を言わせない母親からの厳しい一言であった。

本書の主人公リヴィエールは、航空輸送会社の支配人である。彼の命令は非情である。出発を遅らせた者は、その理由が濃霧のような不可抗力であっても精勤賞は出さない。20年勤続の熟練工であっても、ただの1度の不備で容赦なく首を切る。社内に親しい人間を作らず決して甘えを許さない彼の態度は、従業員に尊敬と畏怖の念を抱かせた。

では、彼は人情を持たない冷酷な人間であったのかということのようなことはない。むしろ母親にもよく似た温かい慈愛の持ち主である。彼が憎むのは、あくまで人間が持つ弱さの部分である。彼は自分が罰することで事故を減らすことができる、もし自分が1度でも見逃せば、従業員全体に油断が生じ、毎回の飛行が致命的な危険を伴うものになると信じているのである。

本書で彼は「部下の者を愛したまえ。ただそれと彼に知らさずに愛したまえ」と述べている。そこにあるのは愛されることを求めない無償の愛である。自動操縦も雨雲レーダーも無い時代に敢行された夜間飛行には予測できない危険が存在する。彼は搭乗員たちを未知と恐怖に満ちた夜から救い出し続けているのである。

言葉の厳しさは、思いやりの裏返しの時もある。あの時の母親は、言葉は厳しくとも私を思って叱ったのだと今なら理解できる。人が命令や説教をするときには、相手の行動にとどまらず、人格をも否定しているのではないかという不安が付きまとう。本書に刻まれたリヴィエールの信念は、その不安に対する一つの答えとなっている。もしあなたが誰かの上に立っているのなら、また今後立つ可能性があるのなら、リヴィエールという人間の信念と葛藤にぜひとも触れていただきたい。